亀甲竜の育て方

Dioscorea elephantipes

ヤマノイモ科 / Dioscoreaceae

> 地上に半分顔をのぞかせる巨大な塊根が、年月とともに深く割れて甲羅のような模様を刻んでいく——亀甲竜は、その変化そのものを何十年も楽しめる、コーデックス植物の代表格です。

基本データ

成長期	冬型（秋〜春に生育、初夏〜夏に休眠）
耐寒温度	目安−4℃前後（乾燥時）。日本の多湿な冬は最低気温10℃を下回り始めたら室内の明るい場所へ取り込むのが無難
日照	生育期は日なた〜明るい場所。塊根表面は強い直射日光にやや弱く、つる・葉の陰になる程度が理想
播種適期	9〜11月（気温15〜20℃前後を安定して保てる時期が目安）
発芽日数	15〜25℃程度で7日〜3ヶ月ほど（個体差が大きい。目安18〜20℃前後）
主原産地	南アフリカ（西ケープ州クランウィリアム地区〜東ケープ州フラーフ・レイネット、ウィローモア、ユニオンデール地区の乾燥した岩場・低木地帯）
難易度	

概要・魅力

亀甲竜（きっこうりゅう、Dioscorea elephantipes）は、南アフリカの西ケープ州クランウィリアム地区から東ケープ州のフラーフ・レイネット、ウィローモア、ユニオンデール地区にかけて点在する、乾燥した岩場や礫の多い斜面に自生するヤマノイモ科（Dioscoreaceae）の塊根植物です。標高150〜1,200mほどの、棘のある多肉質カルー低木地帯に、周囲のカルー低木の陰に守られるようにして育つ姿が観察されています。

その名の由来は、地上に半分顔を出す巨大な塊根（コーデックス）の表面にあります。株が成長するにつれて表皮に深い亀裂が入り、多角形のプレートが敷き詰められたような、まるで亀の甲羅のような模様を形成していきます。若い実生苗のうちは滑らかだった表皮が、年月をかけて少しずつひび割れ、無骨で力強い質感へと変化していく過程こそ、亀甲竜という植物最大の魅力です。海外では見た目の印象そのままに「Elephant's Foot（象の足）」とも呼ばれています。好条件下で長い年月を過ごした株は、直径3mを超え、高さ約1m、推定重量365kgに達したという記録も残っており、塊根植物の中でも屈指のスケールに育つポテンシャルを秘めています。

この塊根の成り立ちには、興味深い進化の背景があります。アフリカ産のディオスコレア属を対象にした分子系統・形態進化の研究では、森林環境から山火事の起こりやすい開けた草原環境へと進化の舞台を移す過程で、つるに巻きつかず自立する直立性の茎と、地表に露出する大型の塊根を持つ系統が枝分かれしたことが示されています。塊根を覆う厚いコルク質の樹皮は、火災や食害から生長点を守る役割を担ってきたと考察されており、この「象の足」型の姿は中新世の半ば以降に進化したと推定されています。単子葉植物であるディオスコレア属は、双子葉植物のような維管束形成層を持たないにもかかわらず、独自の仕組みで塊根を年々肥大させていく点も、植物学的に見て興味深い特徴です。

亀甲竜はまた、雌雄異株の植物でもあります。塊根から伸びるつる性の地上部は、生育期のあいだに旺盛に茎を伸ばしてハート形の葉を茂らせますが、休眠期に入ると地上部だけが枯れ落ち、塊根そのものは何年、何十年という時間をかけて肥大を続けます。乾燥した季節を生き延びるための水分と養分は、この塊根にたっぷりと蓄えられており、地上部を失っても株自体は生き続けるという、コーデックス植物ならではのしたたかな生存戦略を体現しています。

© 2026 SEEDSTOCK

栽培の面では、40℃を超える酷暑にも、−4℃前後の低温にも耐える丈夫さを備えており、コーデックス入門種としても人気があります。ただし、生育期と休眠期がはっきり分かれた冬型のサイクルを持つため、水やりのタイミングを季節ごとに切り替える意識が欠かせません。この基本さえ押さえれば、栽培下でも70年前後にわたって育て続けられるとされる、息の長い付き合い方ができる植物です。種子から育てる実生であれば、まだ滑らかな塊根が年々ごつごつと亀甲模様を刻んでいく変化を、自分の手で見届けられます。SEEDSTOCKでは、そんな亀甲竜の実生ならではの成長の楽しみを、できるだけ多くの方に味わっていただきたいと考えています。

- **甲羅状に割れる塊根** — 実生から年月をかけて、滑らかな表皮が多角形のプレート模様へと変化していく過程そのものが観賞の醍醐味です。
- **驚異的なスケールに育つ潜在力** — 直径3mを超えたという記録もあり、じっくり育てるほど風格が増します。
- **丈夫でメリハリのある栽培サイクル** — 酷暑にも寒さにも比較的強く、生育期・休眠期の切り替えさえ押さえれば長く育てやすい植物です。
- **実生ならではの個体差** — 塊根の割れ方や色合いは株ごとに少しずつ異なり、種子から育てるからこそ出会える一株になります。

> 亀甲竜は南半球原産の冬型植物です。日本で栽培する場合は、現地の季節をそのまま半年ずらして読み替え、秋に成長を始め、冬から春にかけて生育し、初夏に休眠に入るサイクルで管理します（詳しくは「置き場所」「水やり」をご覧ください）。

置き場所

亀甲竜は自生地で、岩の多い乾燥した斜面にカルー低木の陰に隠れるようにして育ちます。この生態を踏まえると、栽培でも「つる・葉には明るい光を、塊根本体にはやや控えめな光を」という置き場所づくりが基本になります。

生育期（秋〜春）

新芽が動き出す秋から、旺盛につるを伸ばして生育する冬〜春にかけては、日当たりと風通しのよい屋外で管理します。目安として1日4〜5時間ほどの直射日光が当たる場所が理想です。ただし塊根の表面は紫外線に弱く、直射日光にさらされ続けると傷みやすいため、つるが茂って葉が塊根に自然な影を落とすくらいの状態がちょうどよいバランスです。鉢植えでは、塊根の上半分だけを土から出し、下半分は埋めたまま管理すると、乾燥や強光からのストレスを和らげられます。

つるは長く伸びるハート形の葉をつけながら旺盛に成長するので、支柱を立てて誘引したり、針金で輪を作ったり、割り箸などで行灯（あんどん）仕立てに組んだりして、姿を整えながら育てると管理がしやすくなります。鉢から自然に垂らして楽しむ仕立て方もあります。

休眠期（初夏〜夏）

初夏に葉が黄変して枯れ込み、つるが枯れ落ちてきたら休眠期の始まりです。休眠中は直射日光を避け、涼しく風通しのよい半日陰へ移動させましょう。地上部を失った塊根だけの状態でも、強い直射日光と高温が続くと表皮が傷むことがあるため、真夏は明るい日陰で静かに休ませるイメージで管理します。

冬季の管理

亀甲竜は40℃を超える酷暑にも、−4℃前後の低温にも耐えるとされる丈夫な植物ですが、これは主に乾燥した状態が前提の耐寒性です。日本の冬は空気が乾いていても土中の水分が抜けにくいことがあり、多湿と低温が重なると株を傷めるリスクが高まります。夜間の最低気温がおおむね10℃を下回り始めたら、室内の日当たりのよい窓辺など、明るい場所へ取り込むのが安全です。屋内では空気がよどみやすいため、サーキュレーターなどで空気を動かし、蒸れを防ぐとよいでしょう。

> 塊根は葉よりも紫外線に弱いという点を覚えておきましょう。つるが十分に茂らないうちの若い株や、休眠期で葉を落とした状態の塊根を、いきなり強い直射日光にさらすのは避けてください。

水やり

亀甲竜の水やりで何よりも大切なのは、「今その株が生育期にいるのか、休眠期にいるのか」を見極めることです。生育期と休眠期で管理を大きく切り替える必要があり、このメリハリを間違えると根腐れや塊根の腐敗につながります。

生育期（秋〜春）の水やり

つるが伸び、葉が茂る生育期は、用土の表面が乾いたら鉢底から流れ出るまでたっぷりと水を与えます。目安として週1回程度のペースで、しっかり乾かしてからたっぷり与えるメリハリを意識しましょう。旺盛に成長している時期は塊根がよく水を吸い上げるため、極端に乾かしすぎないよう注意してください。

休眠期（初夏〜夏）の水やり

葉が枯れ落ちて休眠期に入ったら、水やりは基本的に控えます。休眠期の過湿は、株の寿命を大きく縮めるほどのダメージにつながるとされており、亀甲竜の管理で最も注意したいポイントです。断水に近い状態を基本としつつ、極端な乾燥が続くようであれば数週間に一度、ごく軽く湿らせる程度にとどめます。

切り替えの2つの鉄則

生育期と休眠期の間には、次の2つの「鉄則」を守ることが失敗を避ける最大のコツです。

- **休眠明け：芽が出てから水やりを始める** — 秋になったからといって、まだ新芽が動いていない状態で水を与えるのは禁物です。休眠中の塊根に水を与えると、根や塊根が腐敗するリスクが高まります。必ず新芽の動きを確認してから、水やりを再開しましょう。

- **休眠入り：落葉を見てから断水する** — 初夏になっても、葉やつるが枯れ込む前に早々と水を絞ってしまうと、まだ生育できたはずの期間を無駄に短くしてしまいます。逆に、落葉のサインを見逃して灌水を続けると、休眠に入った塊根が過湿で傷みます。葉の黄変・つるの枯れ込みという休眠のサインをしっかり確認してから、水やりを減らしていきましょう。

休眠期間そのものは、他の多くのコーデックス植物と比べて比較的短く、目安として初夏から夏にかけての1〜2ヶ月ほどで新芽が動き出すこともあります。冬の夜間気温が15℃を下回るような寒い時期は、生育期であっても水分をやや控えめにし、土全体がじんわり湿る程度にとどめると、根腐れの予防になります。

> 「芽が出てから水やり、落葉を見てから断水」という2つのタイミングさえ押さえれば、亀甲竜の水やりで大きく失敗することはありません。迷ったときは、乾かし気味に管理するほうが安全です。

用土・植替え

亀甲竜は岩の多い乾燥した斜面に自生する植物で、栽培でも水はけのよさを最優先にした用土が向いています。生育期にはよく水を吸う一方、過湿には弱いため、「水はけがよく、かつ極端に乾ききりすぎない」バランスを意識して配合を選びましょう。

用土の配合例

栽培者の間では、次のような配合が広く使われています。株の生育段階や置き場所の環境に合わせて選んでください。

- **実生初期向け**：硬質赤玉土（細粒）＋バーミキュライト＝**1：1**。保水性と通気性のバランスがよく、まだ根の弱い実生苗に向いています。
- **育成が進んだ株向け**：硬質赤玉土：日向土（細粒）：ゼオライト＝**5：4：1**。水はけを重視したい場合に適した配合です。
- **シンプルな配合**：赤玉土：鹿沼土＝**1：1**。下層に中粒、表層に極小粒・細粒を使うと、通気性を保ちながら表土の乾湿サイクルを作りやすくなります。

いずれの配合でも、置き場所が多湿になりがちな場合は軽石やパーライトなどの鉱物質を増やして排水性を高め、逆に乾きすぎる環境では保水力のある用土をやや多めにするなど、栽培環境に応じて微調整するとよいでしょう。

鉢

亀甲竜の塊根は横方向に大きく広がりながら成長するため、深鉢よりも**浅く幅広の鉢**が向いています。塊根の広がりに余裕を持たせられるサイズを選び、水はけと通気性を重視した鉢底構造（鉢底石やスリット鉢の利用など）にすると、根腐れの予防につながります。

植替えの時期

植替えの適期は、休眠が明けて新芽・新根が動き出す**夏の終わりから秋にかけて**です。つるが地中から顔を出し始め、生長のスイッチが入るタイミングを狙って行うと、植替え後の回復がスムーズです。休眠中や真夏の高温期の植替えは根を傷めやすいため避けましょう。

塊根を埋めるか、露出させるか

実生から数年（目安2〜3年ほど）の若い株は、塊根を土の中に埋めた状態で管理すると、水分・養分の供給が安定し、乾燥ストレスも和らぐため生育が早まる傾向があります。無理に掘り出して塊根を見せる必要はなく、株が育つにつれて自然に地上へ盛り上がってきます。ある程度の大きさに育ってから、鉢の中央や上部に塊根を配置し直して観賞性を高める仕立て方もあります。どちらが正解というものではなく、生育を優先するか、亀甲模様の観賞を優先するかで選び方が変わります。

発芽のさせ方

亀甲竜は種子から育てる実生が広く楽しまれている植物です。滑らかだった塊根が、年月をかけて少しずつ亀甲模様を刻んでいく姿を最初から見届けられるのが、実生ならではの醍醐味です。SEEDSTOCKの種子で実生に挑戦する際は、次の手順を目安に進めてみてください。

1. **種子を選別する**：亀甲竜の種子は翼のついた扁平でレンズ状の形をしており、直径は約5mmほどです。手に取ったときに中身が詰まっておらず軽すぎるもの、真っ黒に変色しているものは発芽しにくいため、あらかじめ取り除いておきましょう。
2. **前処理をする**：種子の翼の部分を取り除きます。発芽を促す目的で、種皮を紙やすりなどで軽くこすって傷をつける方法（胚を傷つけないよう注意）を紹介する栽培記録もあります。そのうえで、常温からぬるま湯程度の水に24〜48時間ほど浸水させましょう。カビや立ち枯れを予防する目的で、活力剤と殺菌剤を薄めた液に半日〜1日ほど浸けてから播種する方法も広く行われています。
3. **播種の時期を選ぶ**：目安は秋（9〜10月頃）ですが、暦の上での時期そのものより、**気温が安定して15〜20℃前後を保てるタイミング**であることのほうが重要です。室内で温度管理ができるようであれば、秋から春にかけての幅広い時期に播種した実績もあります。
4. **用土を用意する**：排水性のよいサンド主体の用土が向いています。バーミキュライトを多めに配合すると扱いやすく、初心者にもおすすめです。清潔な新しい用土を使い、古土の使い回しは避けましょう。
5. **播種し、軽く覆土する**：湿らせた用土の表面に種子をまきます。覆土の要否については、光を遮ったほうがよいとする資料と、覆土の有無で発芽率に大きな差がなかったとする実生記録の両方があるため、実務的には**種子が半分ほど隠れる程度の軽い覆土**にとどめるのが無難です。深く埋めすぎないよう注意してください。
6. **腰水で高湿度を保つ**：播種後は腰水（底面給水）にし、ラップや透明な蓋で覆って、用土の表面をほぼ100%近い湿度に保ちます。上から直接水をかけると種子が流れてしまうことがあるため避けましょう。

7. **温度を管理する**：発芽適温は15〜25℃程度と資料によって幅がありますが、日本国内の実生報告では**18〜20℃前後**を保てた場合に発芽が進みやすいという傾向が多く報告されています。ヒーターマットなどで温度が大きく上下しないよう管理しましょう。
8. **発芽を待つ**：発芽までの日数には個体差が大きく、早ければ播種後1週間ほどで発根が始まる一方、同じロットの種子でも発芽までに3ヶ月以上かかる個体が混ざることも珍しくありません。適温・適湿を保てていれば、条件が整った状態で発芽率はおおむね8割前後が一つの目安です。発根までなかなか進まない種子は、少し涼しく暗い場所へ移すと動き出すことがあります。焦らず気長に見守りましょう。
9. **発芽後、根を下向きに植え込む**：発根を確認したら、根が下を向くように用土へそっと植え込みます。腰水は発芽後もしばらく続け、生育が進んで気温が上がり始める時期を目安に、徐々に通常の水やりへ移行していきます。
10. **実生1年目の管理**：播種から1〜1.5ヶ月ほどで、小さな塊根が形成され始めます。この時期に土を乾かしすぎると、まだ小さい塊根が枯死してしまうリスクがあるため、生育期は週1〜2回程度の頻度で灌水し、用土が常にやや湿った状態を保つよう心がけましょう。塊根部分を軽く土に埋めておくと、生育が安定しやすくなります。

実生から2年ほど経つころには、それまで滑らかだった塊根の表皮に少しずつひび割れが現れ始め、亀甲竜らしいごつごつとした表情に変わっていきます。若い株のうちは塊根を土に埋めた状態で2〜3年ほど育てると、水分・養分の供給が安定し、じっくりとサイズを充実させられます。焦らずゆっくり見守ることが、この植物との長い付き合いの始まりです。

病害虫・トラブル

亀甲竜は比較的丈夫な植物ですが、いくつか気をつけたい害虫とトラブルがあります。生育期はこまめに株を観察し、風通しのよい環境を保つことが、最良の予防策になります。

害虫

- **ハダニ**：亀甲竜の栽培でもっとも報告の多い害虫です。葉の表面に掠れたような細かい傷が現れたら被害のサインです。乾燥した環境で発生しやすいため、市販の殺ダニ剤での駆除に加え、葉裏に向けてシャワーや霧吹き（水温10〜20℃程度が目安）をかけて洗い流す方法も予防に効果的です。
- **カイガラムシ**：弱った株や風通しの悪い環境で発生しやすくなります。白い綿状の塊や粘着質の分泌物が目印です。見つけ次第、ブラシや綿棒でこすり落とすか、被害の大きい部分を切除しましょう。
- **アブラムシ**：新芽や伸び始めたつるの先端に付着することがあります。早期に発見して駆除すれば、大きな被害には広がりにくい害虫です。
- **アザミウマ（スリップス）**：葉や新芽に発生し、吸汁による白っぽい斑点や葉の変形を引き起こすことがあります。風通しを確保し、発生初期に薬剤を使用すると被害を抑えやすくなります。

根腐れ・塊根の腐敗

亀甲竜のトラブルで最も注意したいのが、休眠中の誤った水やりによる**根腐れ・塊根の腐敗**です。新芽が動く前の段階で水を与えてしまったり、落葉のサインを見逃して灌水を続けてしまったりすると、休眠中の塊根が過湿によって傷みます（詳しくは「水やり」の項目をご覧ください）。塊根の一部が柔らかく変色してきたら早めのサインです。清潔なナイフで傷んだ部分を切り取り、切り口をよく乾かしてから新しい乾いた用土に植え替えることで、被害の拡大を防げます。

その他のトラブル

高温多湿の環境が続くと、カビや軟腐が発生しやすくなる点にも注意しましょう。実生の初期段階では、腰水の湿度を保ちながらも、発芽後は徐々に通気を増やしてカビの発生を防ぐバランスが大切です。梅雨時期など多湿になりやすい季節は、風通しのよい場所へ移動させるか、サーキュレーターなどで空気を動かすとよいでしょう。鉢を密集させすぎると株元の湿気がこもりやすくなるため、鉢と鉢の間隔を空けて空気の通り道をつくっておくのも有効な予防策です。

基本的な管理——生育期は明るい光と適度な水やり、休眠期は乾燥気味に、そして風通しを確保すること——を守っていれば、亀甲竜は過度に神経質にならなくても長く育てられる植物です。SEEDSTOCKでは、こうしたポイントを押さえながら、じっくりと年月をかけて塊根が育っていく過程を楽しんでいただければと思います。

🖊 栽培メモ

亀甲竜の種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp